

「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 千種杏奈

私がインドネシア大学のスプリングスクールに参加した理由は、イスラム教に興味があったからです。私は昨年、タイのチュラロンコン大学のサマースクールに参加し、その際に無宗教だと思っていた自身の宗教観や価値観を見つめ直す経験を得ました。そこで私は、イスラム世界はどのような感覚や価値観を有しているのかを体感し、視野を広げたいという思いがありました。

今回の2週間のプログラム通して、知りたかったイスラムについて学ぶことができたのはもちろん、インドネシアの人々の多様な生活や思考を学ぶことができました。現地で私が得た豊かな学びのうち、特に印象に残っている三点を振り返りたいと思います。

一点目は、イスラム教のお祈りについてです。イスラム教では一日に5回お祈りをしなくてはならないということは知識としてしか得ておらず、渡航前の自分には、厳しく大変そうというイメージしかありませんでした。しかし東南アジア最大のイスティクルルモスクで、人々がお祈りをしている様子を見学させてもらった際に、お祈りは作法に則り自分と神だけの世界に入ること、内省がなされているのではないかと思いました。そして一日5回のお祈りは、その時の感情の起伏や迷いから、一度心を落ち着けて、神との対話を通して自分を見つめ直すことができる貴重な時間なのだ、と考えが変わりました。私も一日のうちで自分を静かに省みる機会があれば、より毎日を有意義に過ごせるのではと感じています。

二点目は日本との関係性についてです。インドネシアではよく Gojock という現地タクシーをよく使い、その運転手さんがたびたび話しかけてきて下さいました。授業で覚えたばかりのインドネシア語と少し英語を使い、3人ほどの運転手さんに日本のイメージを聞いてみると、みな回答が hard working や discipline であったことが印象的でした。またある方は、原爆から立ち直った日本を尊敬していると教えてくれました。

一方で、インドネシアの独立のシンボルであるモナスや、タマンミニの歴史展示では、日本の3年間の占領統治時代の強制労働の説明がなされており、これらの展示を見たとき、日本の過去の歴史に対する罪の意識を感じ、心が重くなりました。しかし私が話した街の人々は、友好的で日本に良いイメージを持っている人が多かったので、日本の占領の事実と責任は消えませんが、戦後多くの人々の努力によってインドネシアとの良い関係性が築かれているのかなと感じました。自分は4月から地方公務員として働くので、地方レベルでも日本とインドネシアとの関係性がより豊かなものになるよう尽力したいです。

三点目は言語学習についてです。プログラム中、授業はすべてインドネシア語で行われ、慣れると楽しく習得できました。インドネシア語はアルファベットで読むことができ、文法が簡単で声調もないため、初心者でも話しやすく、自分が覚えたインドネシア語が街で通じるのはとても嬉しかったです。私は今までドイツ語を2年間、タイ語を半年勉強していましたが、インドネシア語が一番話せるようになったと思います。今回の渡航中、自分は他の言語を勉強してきたにもかかわらず、インドネシア語に比べてあまり身につかなかったことに反省を感じていました。しかし日本語学科の友達が趣味で作ったインドネシア語の冊子のあとがきに「最後まで読んでインドネシア語が話せるようにはならなかったと思います。語学なんてそれでいいと思います。」との言葉があり、心が救われた気がしました。彼のその言葉から、インドネシア語をはじめとして自分が勉強してきた言語がいま分からなくても忘れてしまったとしても、今後また学び続けていきたいと思いました。

以上の三点が、今回のインドネシア渡航で私が学んだ印象的なこととなります。

最後になりましたが、今回のプログラムを支えてくださったインドネシア大学と京大の先生方、職員のみなさまには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。そして2週間インドネシア大学の日本語学科の友達と過ごした時間は、本当に楽しく素晴らしいものでした。今後も交流を続け、彼らが日本に来たときには必ず恩返しをしたいと思います。ありがとうございました。